

藤井 倫明 学位(博士) 請求論文審査報告書
論文題目：瓜子姫の成長——その成立から現代まで——

『日本昔話大成』によれば、日本列島で伝承されてきた昔話の話型は、動物昔話およそ 100 話型、本格昔話およそ 200 話型、笑話 400 話型を数え（新話型を含む）、全体では 700 にも及ぶ話型が日本の昔話として登録されている。その数多い話型の中から、論者は、「瓜子姫」（本格昔話、誕生、話型番号 144「瓜子織姫」）と呼ばれるただ一つの昔話を対象として、徹底的な分析を加えて博士論文に仕上げた。

もちろんそれは、「瓜子姫」という昔話がただの七〇〇分の一ではなく、ある意味で日本の昔話を象徴する話型として存在することによって可能になったわけだが、論者の熱意と執着とがなければとうてい果たし得ない作業であったということは疑いようがない。

そもそも本来の昔話は、文字をもたず、音声だけで伝えられてきた口頭伝承であり、そこには、それぞれの民族の歴史や文化や心性が抱え込まれているのである。そして重要なことは、一方で、昔話は個別の民族や地域を超えた伝播の後にそれぞれの土地に根付いているということでもある。本論文で対象とされた「瓜子姫」という昔話は、一般には、それほど親しみのある昔話ではないかもしれない。しかし、日本列島の広い範囲に分布し、採話例が多いにもかかわらず、いわゆる五大おとぎ話と呼ばれる「桃太郎」や「花咲か爺」などのように近世に遡る時代から絵本として再構成され画一化されてしまった作品とは違って、地方ごとの特色を保持してバリエーション豊かな語りとして伝えられている昔話である。そこに、研究対象としての貴重さも存する。

また、昔話「瓜子姫」は、古い時代において海彼から伝播したということが窺いやすい昔話であり、その原話や伝播ルートなどに関して、従来から議論が行われてきた昔話であった。また、国内に分布する話を比較しても、東日本（主に東北地方）と西日本とのあいだで、その語り方に関して大きな相違が見いだせる話型であり、その点に関して注目されてきた昔話であった。そうした諸点において、昔話研究の対象として恰好の話型だということができるのである。そしてまた、近代においては、出版文化やマスメディアのなかで、さまざまなかたちで再構成されたこともわかっており、近代の幼児教育における昔話の役割を考える上でも、重要な研究対象となる昔話なのである。

そのように、多面的に興味深い要素を有する昔話であり、研究者から注目されることの多かった「瓜子姫」だが、従来は単発的な論文ばかりが書かれているという状況で、「瓜子姫」の総体を体系的に考えようとする研究は皆無であった。そのようななかで論者は、今までに蓄積された「瓜子姫」研究を集大成し、新たな研究を導き出そうとして、本論文を構想している。それは、個別の「瓜子姫」研究のためというだけではなく、大きな枠組みのなかで昔話総体を研究するためにも多大な貢献を果たすに違いないという意味で、昔話研究に大きく寄与する問題意識を内包した論文であると評価することができるのである。

本論文は、大きく二部に分けられており、その第一部は「口承文芸としての「瓜子姫」、第二部は「再構成された「瓜子姫」」を対象として論じられている。

第一部で扱われているのは、古くから口頭伝承として伝えられてきた「瓜子姫」を対象として、採録された昔話資料集を網羅的に検証しながら、考察を加えている。具体的にその内容を紹介すると、第一部は以下の三章で構成されている。

第一章 「瓜子姫」の誕生

第二章 モチーフ別の起源とそれに見る「瓜子姫」の地域差

第三章 瓜子姫と関わる他の昔話との比較検討

第一章においては、「瓜子姫」という昔話がどのように成立したかということ、先行研究を整理するかたちでまとめている。従来の説を確認すると、「瓜子姫」の起源には海外の説話、とくに「偽の花嫁」系統の話あるいは「ハイヌヴェレ型神話」が深くかかわるとする説が有力であったが、あらためて諸資料を丹念に検討することによって、論者は、昔話「瓜子姫」は、「ハイヌヴェレ型神話」を基礎としながらも「偽の花嫁」をはじめさまざまな伝承の要素を融合することで成立したのではないかという結論に至る。

また、「瓜子姫」で外敵の役を務めることの多い「アマノジャク」の由来についても本章で考察し、瓜子姫とアマノジャクは、元は別の存在であったが、死なない瓜子姫が語られてゆくなかで、流れる血で植物の根を染めるというモチーフの担い手としてアマノジャクが昔話「瓜子姫」に取り入れられたのではないかとみなす。いずれの結論も、慎重な分析を加えるなかで導き出されてきたもので、性急で極端な結論を出そうとしがちな若い研究者のなかで、その慎重さは貴重な態度として好感がもてるものである。

第二章では、昔話「瓜子姫」を構成するうちで、とくに重要なモチーフの起源と地域による違いを考察している。多くの昔話がそうであるように、「瓜子姫」という昔話も、地域によるモチーフの差異が大きいのだが、広い伝承範囲をもち例話が多いこともあって、その差異は他の昔話よりも顕著になっている。そのなかで取り扱われるモチーフは、「姫の生死のモチーフ」「誕生のモチーフ」「外敵の末路と血のモチーフ」「木のモチーフ」「真相発覚のモチーフ」「機織のモチーフ・嫁入りのモチーフ」「イモのモチーフ」等である。

そこで論者は、それぞれのモチーフの地域差をいままで採録された資料をもとに分析し、なぜそのような結果となったのか、それらのモチーフはどのような意味があるのかということ考察した。それらの結果をもとに、「瓜子姫」の日本列島における伝播と変容の経緯を整理し、東北を中心とした東日本が古い話型を残しており、中国地方を中心とした西日本の話は比較的新しい要素をもつということを確認した。しかし、昔話「瓜子姫」の発生地域は西日本にあり、もともと語られていた西日本では海外との交流などで徐々に新しい要素が加わり段階的に変化していったのに対し、後から伝わった東日本では比較的古い型が残されたという結論を導いてくる。また、「瓜子姫」の分布は全体的に見て日本海側に偏っており、それはこの昔話が日本海を通じて伝播していった痕跡ではないかとみなしている。

第三章では、「瓜子姫」と似た要素を持つ他の昔話との比較検討を試みる。と

くに重視したのは、昔話「天道さん金の鎖」であり、その結末にみられる血のモチーフ（流れ出た血が作物の根を染める）や、外敵の家への侵入、木での外敵とのやりとりなど、「瓜子姫」と共通するモチーフや展開を丹念に分析する。その結果、この二つの昔話は起源を同じくし、伝播の過程において何らかの接触があったのではないかという可能性を指摘する。明確な結論には到らないものの、その慎重な論の展開の仕方は、研究者として大事な態度である。

第二部では、作家などによって再構成されて児童向けの読み物となった「瓜子姫」について考察しており、その全体は以下の四章によって構成されている。

第一章 アンケート結果に見る現代の瓜子姫への認識

第二章 近代以前の文字に残る「瓜子姫」

第三章 近代以降の児童向け「瓜子姫」

第四章 忘れられた「瓜子姫」

第一章では、現代において「瓜子姫」という昔話がどのように認識されているのかということ客観的に知るために行ったアンケート結果の紹介とその分析を行い、「瓜子姫」が現在、どのように認識されているかを確認するところから第二部をはじめている。そして、昔話「瓜子姫」が現代ではけっして高い知名度があるとはいえず、すでに「聞く昔話」から「読む昔話」に変わりつつあるということを確認するのである。

第二章では、近代以前に文章として残っている「瓜子姫」の再構成作品について考察している。その数は多くはないが、昔話「瓜子姫」の再構成作品として御伽草子『瓜姫物語』と柳亭種彦『昔話きちちゃんとなん』を取り上げ、当時の「瓜子姫」がどのようなものであったのかということも含めて考察している。そして、「瓜子姫」の昔話が江戸時代に絵本として発行された痕跡もなく、それが近代以降においても、あまり多くの再構成作品を生みださなかった要因ではないかと指摘する。

第三章では、近代以降、児童向けに再構成された「瓜子姫」がどのようなものであり、どのように読まれたのかということ考察している。ここでは、記録された文献資料の徹底的な探索をおこない、近代における一五〇種にもおよぶ「瓜子姫」の再構成作品の流れをまとめている。たいそうな時間を要したと思われる労作である。そしてその結果、近代以降の「瓜子姫」再構成作品は口承文芸としての資料を参考にするというよりは、一度再構成された作品をもとにして、新たに再構成を加えるという流れの上にあるということを見いだす。具体的にいうと、高野辰之・楠山正雄らが再構成した作品の流れを汲む作品群と、関敬吾・坪田譲治・松谷みよ子らが再構成した作品の流れを汲む作品群とがあり、その二つの流れのなかで、膨大な再構成作品がつぎつぎに生みだされているさまがわかったのである。また、それ以外に、広く読まれた柳田国男と木下順二の再構成作品の考察や、近代以降、挿絵付きで出された「瓜子姫」における挿絵についても考察を行うなど、本論文でなされた可能な限りの網羅的な検証は、今後の昔話研究に資する有益な資料ともなろう。

第四章では、後の再構成作品の原典とされることもなく、作品そのものも読まれることがほとんどないままの「瓜子姫」再構成作品に光を当て、忘れられた作品を掘り起こすことに挑戦している。取り上げているのは、石井研堂、藤澤衛彦、

浜田広介、平林英子らの作品である。そのなかで論者は、たとえば著名な童話作家である浜田広介の「瓜子姫」を取りあげながら、その再構成作品がどのような原話から組み立てられたものであるかを、厳密な検証によって導き出そうとするなど、伝承昔話と再構成昔話との関係を独自の視点によって追究しているのだが、それは昔話の「今」を考える上でたいそう興味深い試みである。そして、なぜ人々に受け入れられなかったのかということまで視野に収めて考察することの意味は、存外大きいのではないかと思わされた。

はじめにも述べたように、ただ一話の昔話「瓜子姫」を取りあげて、その伝承と後世における受容に至るまでの全体を考察するという、今までの昔話研究では類を見ない研究として、本論文は貴重な試みであると評価することができる。しかも、現代社会においては、「瓜子姫」という昔話は、幼児虐待の要素を含むなどその残虐さゆえに敬遠されがちな作品だと思われるのだが、あえてそうした斜陽傾向にある昔話を対象にして、熱意を込めて研究し、「瓜子姫」の復活を願う論者の情熱に共感を覚える。もちろん、今後、論者のめざすようなかたちで昔話の受容や享受が進むかどうかはわからないが、幼児教育や児童の読み物として、昔話が有効活用されることを期待したいものである。そして、論者の研究がその一助となればと願わずにはいられない。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規に従って平成29年2月10日に口頭試問および公聴会をおこない、論文内容に関する質疑および論者の学力および将来的な能力等について確認をおこなったことを明記する。

その上で、本審査委員会は、本論文が、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内実を有していると判断したことを、ここに報告する。

平成29年2月22日

主査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻
教授 三浦 佑之

副査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻
教授 島村 幸一

副査 國學院大學大学院文学研究科
教授 花部 英雄